

Ⅳ．発掘調査の総括

方形周溝墓の「台と溝」

富士山麓から南東に連なる愛鷹、箱根山麓に旧態依然として並ぶ方形周溝墓群（注1）のなかに「本地域の瓜生堂遺跡第2号方形周溝墓（注2）」とでも言うべき方形周溝墓が愛鷹山麓、沼津市尾上Ⅲ橋遺跡（注3）に発見された。以下、第1号墓の詳細な観察の結果を報文にしたがうと、「平面プランは南北が長い整然とした長方形を呈し、規模は、基底部で17×13m、周溝外側で21×16.4mを計測し、かなり大規模な方形周溝墓である。墳丘構築にあたって、まず富士黒土層あるいは休場ローム層まで一旦掘削し、その上に盛土を施しており、最大で1mを越す盛土が認められた。（中略）また、断面図にみる通り周堤を確認することができた。これは周溝に沿って土を盛り、内部を一旦凹地状にして、更に盛土したものである。墳頂は東南側に地山が傾斜しているため、東方からみるとかなりの比高を感じることができ、差は1.3～1.5m程にもなる。（中略）主体部の構築順序は、第2層目の暗褐色土を盛った段階で土壌掘り方を設け、棺を中央に安置した後に、墳丘全体を盛土で被覆し、埋納したもので、（中略）周溝内の各所から大甕式土器の破片が多数発見されているが、ほとんどが溝底からやや浮いた状態」である。

この事実は「方形周溝墓が本来、平面における区画割を主眼としている以上、封土（盛土）の存在は二次的なものとも考えられるが、視点をかえてみるならば、今日大多数の方形周溝墓より主体部の検出をみていない事実からして、何らかの封土（盛土）が存在していたことが推察される。しかも、主体部の埋葬施設はその封土（盛土）上もしくは封土中に置かれていた可能性が高いと思われる（注4）。」予察を裏付け、今日では一部に盛土の存在を否定する（注5）むきもあるものの、大方は盛土を肯定するに至っている。

そして、この後、「台」をもった方形周溝墓の「呼称」に及び（注6）、最終的には「結果としての溝か、目的としての溝か（注7）」として東西対抗（注8）の様相を呈し、その解決策をいずれもこの東海地方に求めている場合が多い。

それではまず、なぜ、「台」のない方形周溝墓の発見が相次いだのか、それはすでに占地条件に起因する指摘（注8a）がある。昭和39年、東京都八王子市宇津木遺跡で命名をみた「方形周溝墓（注9）」は昭和40年代に至り、列島改造ブームとともに爆発的な勢いで発見され、事実、本地域の方形周溝墓もこの時期の発見が圧倒する。そして、その占地は宇津木遺跡がそうであったように、山麓より「樹根」状に沖積地に没する幅広い台地、つまり「舌状台地」なる考古学用語がもっとも適切な地形条件下にあり、その台地のいわゆる「根方」、「根小屋」等と称される中、近世集落の背後が、近世に至り行きづまった生産性から絶好の開墾の奨励地であったことも確かで、また、そこに時代をこえて、高速道路建設や宅造開発が集中していたのも周知される。以下、その発掘調査に及ぶ時、すでに表土中に拡散してしまった「攪拌土である盛土」の確認は至難の技で、当時の平面的な発掘調査結果は至極当然の成り行きだったかも知れない。

したがって、開墾の及ばない「周辺の丘陵と異なり、平坦部の少なく痩せた尾根（沼津市尾上Ⅲ橋遺跡）」や、「洪水・氾濫—冠水—湛水という一連の常襲地帯の現在の水田より約3～4m下（静岡市川合遺跡、注10）」に保存されていた方形周溝墓や墳丘墓（川合遺跡2基）が、一時の経済の低迷をこえて、より高く、より低くむかう開発と背中合せに、現在、その実態を表出しつつあることは、かつて我々の発掘調査の大半が縄文中期の大遺跡であったのに対して、最近では一段上の山麓の縄文早期遺跡であったり、低湿地で相次ぐ水田跡の発見等からも経験している。

反面、周溝は掘削行為をもってなるため、その行為の結果（痕跡）も如実に反映され、形態分類の格好の題材となって、「東日本の方形周溝墓は四隅が切れて陸橋となるもの→隅が1～2ヶ所切れているもの→周囲全体を溝がめぐるもの（注7）」への変遷が一般化されつつあり、事実、弥生中期に至ると「四隅が切れて陸橋となるもの」が、清水市能島遺跡（注11）以西、遠江天竜川流域を中心に土器棺墓と相俟みえながら発展をみていく（注12）。この時、本地域（駿東、伊豆）は文化が希薄で、その発見もないが、箱根をこえて横浜市歳勝土遺跡（注13）を代表に関東地方一円に隆盛を極めていく。以下、後期後半をむかえてやっと、本市滝戸遺跡が、それから東にむけて沼津市二本松遺跡、韭山町神崎遺跡→沼津市目黒身遺跡、韭山町奈古谷宮原遺跡が並ぶ（注1）。これが前述の「隅が1～2ヶ所切れているもの」にあたるのか、いずれも「辺」まで欠いている場合が多い。この後、「古墳時代に入るとほとんどが—四周溝のめぐる型—となる（注4）」が、傾向は充分指摘されながら、依然として「隅が1～2ヶ所切れているもの」、「辺を欠くもの」が本市南部谷戸遺跡をはじめとして残るのも事実である。

これを、「周溝については明瞭に墳丘裾を一周する例が以外と少なく、一周溝でさえ安定した形状を呈しておらず、また、墳丘の対角線上となる四隅の掘削が不十分なものが多く、一辺の溝内において中央部分が深い傾向にある。」指摘があるならば、「一辺ないし二辺の溝の存在しないタイプが、旧地形の掘削位置、または後世の削平の差異といったような条件的なものとしてとらえることが可能である。」だけでなく、よほど「掘り込みが深くなり、後世の削平をのりこえて明瞭な周溝を存在づけ（以上、注8a）」ない限り、全周すべき周溝が四隅が切れたりしてとらえられる危険性もはらんで、その形態分類には不安が付きまとうのである。

とにかく、周溝の「四隅の切れるもの」が次第に一般的でなくなり、「四周溝のめぐるもの」の実態に接するとき、その平・立面形の膨張に比例する掘削土量は必要不可欠のものであり、逆に前者の主体部残存例をその「薄さ」に求められると妙に納得されるのである。

さらに、この周溝を詳細に観察して、その掘削の意義と祭祀行為との関連を解く試みもなされ、一例を拾えば、一様でない周溝にみせる僅かな傾向である四隅のたかまりに対して「階段状施設」の意義を説き、「そこは溝内の入口であり、溝が埋没することは入口としての機能が必要でなくなることと同時に、周溝内諸施設、周溝内儀礼の終了を意味し、入口部での土器の供献、投棄はその最終儀礼行為であった。」とする。そこで本遺跡における両墓をみるが、いずれ

の行為も周溝中層の埋没後に挙行されたもので、その時、すでに埋没下の「段」、「台」、「掘り込み」等に因果関係を求めるには不利で、それより、いとも簡単に埋没を許し、また、それを待っていたかのように開始される各種の祭祀行為をみる時、「掘った土を盛って」残る痕跡にまで及ぶ意義の追求がなくとも、「溝内祭祀」に対する関心の度合は充分に知れる。しかし、その行為の挙行を「人為的な埋めもどし」で対処するのは、「関東地方の方形周溝墓は溝による区画が第一義である。」から逸脱しかねないし、「土器の出土状況も多様で一定の規則性は看取できない（注、以上8b）。」ような、依然と続く暗中模索のなかで、空間的な精神行動の実体を痕跡として規則性まで求めるにはいまだに限界があり、唯一、呈示される事実は周溝内壁が描出する「形」へのこだわりであろう。

前方後方型周溝墓の「形と存在」

こうして、弥生時代の伝統的な墓制の形となった「方」形は、その最終段階をむかえて「前方後方」形を加えることは周知される。そして、ここで「前方後方型周溝墓」の所以たる、方形周溝墓に付された「前方部」に注がれる視点は、先ず、「地上と天界とを結ぶ通廊（注14）」にその起因を求めて、周溝の断絶箇所を抽出することから始め、「使用した資料の大半は、墳丘を失った小規模な古墳が多い（方形周溝墓も含む、注15）」という不利な条件にありながら、前辺中央断絶例の「開口型」から「前方後方型」の集成が精力的に行われ、分類、系列化が計られていく、いわゆる田中分類がされる。—そして、このあたりから観察の視点が周溝内壁で描出される「前方後方」形に移って、方形周溝墓にみせた周溝内面への執着が薄れていくのも致し方ないことである。—それから、さらにこれを助勢して「方形周溝墓の一辺の中央に通路をつくって、それがだんだん発達し、やがてここは通路ではない、通るなということで、張り出しを大きくして、そこにもたくさん土を盛って入ってこられないようにするという流れがあるようです（注16）。」と、前方後円墳の「前方部は後円部に至る通路である解釈（注17）」のひとつに協調して、これを先導していくのである。しかし、前方後円墳の起源論にも「これという方向性を見いだしかねているのが現状である（注18）」ように、「通路」に関しては、占地、ならびに保存条件でいかようにも変化してなる「周溝の遺存の有り方」に散漫的であった従来の平面的な発掘調査の「産物」、つまり、それが「陸橋、ブリッジ」状と表現した、方形周溝墓の内と外を同一面でつなぐ周溝の断絶箇所を指しているならば、定型化された「前方後方型周溝墓」にも同様の箇所は認められるし、さらに、今日の造墓当初より「立体的」な方形周溝墓では、なお、説明不足は至めず、依然としてその発生の「継起」は模糊したまま今日に至っている、とするのが妥当であろう。

また、この時すでに具現化された前方後方型周溝墓を見据えて、「東国の前方後方墳の分布する地域には東海系土器を出土する遺跡が多く、実際に東海系土器を出土する前方後方墳が多い。これらを総体的に、そして古墳時代初頭の政治状況を考えた時、前方後方墳は東海地方西部を中心とする地域から派遣された将軍の墓とするのが妥当であり、前方後方型周溝墓は在地